

長崎大学  
NAGASAKI UNIVERSITY

ISSN 1347-7994

Autumn

Vol.  
53

# Choho

長崎大学広報誌  
[チョーホー]



特集 | チャレンジする  
長大学生

Choho

長崎大学広報誌 [チョーホー] Vol.53 2015年10月1日発行 長崎大学ホームページ <http://www.nagasaki-u.ac.jp/>

学びの  
森の  
風景

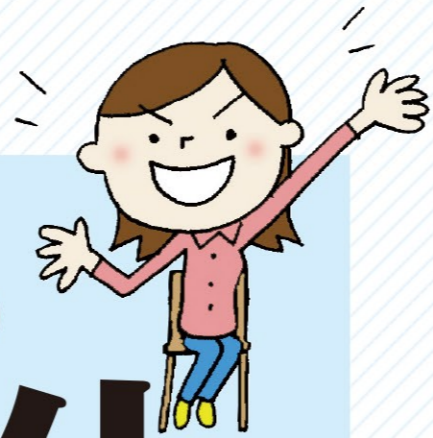
Scene 15



文教キャンパスの附属図書館の横の雑木林には、くねくねとした散歩道があり、ちょっと遠回りしても歩きたくなる風景が学生にも愛されています。秋は銀杏、春は桜、6月には紫陽花と、季節で表情が変わります。しかも、図書館の壁が鏡のようになって木々が写り込むので、景色も2倍楽しめるのです。撮影/沖田夏樹(経済学部 職員)

特集

# チャレンジする 長大生



長崎大学には、自主的に学び、自らの力でチャレンジする学生がたくさんいます。学生担当の堀内伊吹副学長は語ります。

「生徒」だった高校までとは異なり、大学に入ると「学生」になり、自分の意志で自らの専門(専攻)を選び、学ぶこととなります。長崎大学では、この自主的な学びの方法としてアクティブラーニングを重視しています。学生たちは能動的に学修することを通して、学問的な基礎力を身につけるとともに、論理的分析能力や批判的思考力、創造的思考力を伸ばしていきます。3年次以降はこれらの力を活かしながら、専門教育や、さらには地域に出かけてのフィールドワークやインターンシップなどで自らの学びを深めていくのです。

## 基礎力を養いながら、大学から地域へ 成果だけを求めず、プロセスを重視

大学としても、自らの力でチャレンジする学生を全面的に支援しています。その一つが(夢への架橋)チャレンジプロジェクトです。そのなかから、ながさき海援隊など、地域で活躍する団体もでてきました。また、それ以外にも大学内外のプロジェクトやコンテストへの参加を積極的に後押ししています。大学は、学生たちに成果だけを求めるのではなく、彼らの成長過程そのものを応援したいと考えています。何でもやってみなければわからないし、壁にぶちあたって初めて気づくこともあります。学生たちの主体的なチャレンジは、アクティブラーニングそのものだと考えてほしい。

今回は、そんな長大生の姿を、地域編、キャンパス編、自分自身編と分けて紹介していきます。

※「夢への架橋」チャレンジプロジェクト/学生の自主企画を長崎大学として応援するプロジェクトで、今年度で2年目。期限もテーマも条件も自由で、学部の枠にとらわれず、ゼロから築いていくチームや、すでに動き出した活動のブラッシュアップを目指すチームなどが名乗りをあげ、審査にのぞみます。採択されると資金的な援助もあります。



学長室  
だより

## 「夢への架橋」 チャレンジ・プロジェクト

長崎大学は、学生諸君が夢や志を育み、その実現にまい進することのできる場であり続けたいと思います。そのために、学生諸君に多くの新鮮な出会いの機会を提供し、主体的学びや実践の背中を押すべく、日々心を砕いています。

そんな試みの一つが、今回のCHOHOが取り上げている「夢への架橋」チャレンジ・プロジェクトです。10年前から継続してきた「夢募集」を発展的に解消し平成26年度にスタートしました。学生の夢実現企画を公募し、その中から学長と学生委員会教員からなる選考委員会での面接審査で毎年約10件の企画を選び、上限50万円の支援を行います。

過去2回の印象は、荒唐無稽な夢の提案は少なく、地に足のついた専門性を踏まえた企画が多いことです。したがって実践の過程で取組内容が進化し、企画段階よりも格段に事後の評価が跳ね上がるがあります。その代表例が、今年度の事後評価で学長賞に輝いた「美しい長崎の

海を!!」です。当初は漂着物の海浜清掃を行う普通のボランティア活動という印象であったのが、1年後の成果発表会では唸られました。水産学系学生グループが「ながさき海援隊」としてスタートした活動は、急速に他学部生や地域のNGOや自治会へとネットワークを拡大し、今や地



域おこしにも一役買うところまで発展を遂げていたのです。さらに注目すべきは、漂着物の分類など調査活動を行い学会発表など学術的な展開にもつなげている点です。そして、彼らの夢は、もう国境をこえて海外の海にまで及びつつあるようです。

順調なスタートをきった「夢への架橋」チャレンジ・プロジェクトが、今後さらに成果を積み重ね、長崎大学の目玉プロジェクトとして定着、発展することを期待します。学生諸君の柔軟な頭脳から生み出されるアイデアと疲れを知らない行動力、そして失敗を恐れないチャレンジ精神こそが、その原動力となります。

片峰 茂

### CONTENTS

長崎大学広報誌  
[チョーホー]  
Choho Vol.53

本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報誌Choho vol.〇から」と明記してください。学外の方は、事前に広報戦略本部までご連絡願います。

学長室だより	「夢への架橋」チャレンジ・プロジェクト	1	表紙のはなし
特集	チャレンジする 長大生	2	台風一過の長崎の海、橋湾を背景にすくと立つのは「ながさき海援隊」のメンバー。長崎のあちこちらの海浜清掃をしながらゴミの分析を行って環境問題を考えるグループで、地域からの厚い信頼を集めています。左から尾崎健史さん、山喜邦次さん、平田大樹さん(いずれも水産・環境科学総合研究科2年)
新コーナー サークルの星!	ヨット部/囲碁同好会/全学サッカー部/剣道部女子	13	
長崎大学のいま!	多文化社会学部	15	
大学の研究最前線	茶葉の摘みごろを見張って知らせるテクノロジーの開発	19	
Information	ながさき水産科学フェア・テクノパワー土木おもしろ体験隊・長大祭	21	
	長崎大学「通」クイズ	22	
	編集後記	22	



あるときは、長崎市郊外で地元自治会と協力しながらの海浜清掃。またあるときは、壱岐での地域イベントで活動発表。月に一、二回は常にごくかの浜や川に足を運んで清掃や分類などの自主活動をする(ながさき海援隊は、その名の通り、長崎の海を応援する長大生チームです。代表で水産・環境科学総合研究科二年の尾崎健史さんにお話を聞きました。

「長崎は海ゴミの量が全国で一番多く清掃活動自体も行われているのですが、市民レベルでの調査活動があまりされていません。そんな状況を改善するために僕らが調査してデータをまとめ、海ゴミ問題の解決の糸口をみつければと考え、活動を続けています」。

もともと尾崎さんの学んだ水産学部には、海浜での実習や活動の後に清掃を行う伝統があります。それを全学的に広げて有意義な調査、普及活動に発展できないか?というのが活

動の動機だったといいます。

「ボランティアというハードルが高いし、海浜清掃だけでは集まる人数も限られてしまうので、パーベキューやサーフィン、地引網などとドッキングさせて参加者を募ります。どうせなら楽しくやりたい。地元自治会やNPO団体などの清掃活動といっしょにやることもあります。海ゴミの調査分類は世界基準に基づいて行うため、ワークショップでそれらの情報を共有し、活動しています」。

回を重ねるごとに地域のネットワークとのつながりが深まり、誘った学生からも「環境問題に関心をもつようになった」と声を寄せられたことも。(夢への架橋)採択は二年連続で、昨年度は学長賞も受賞しました。

「実は今年十月に五島で全国海ごみサミットが開催されます。そこでしっかりとした報告を行えるよう、いまデータをまとめている最中です。今後は、海外の団体と協力して活動を行いたいですね」と尾崎さん。

年々深刻化する海ゴミ問題には国境がなく、解決のゴールがどこにあるかは簡単には見えません。だからこそ、水産県長崎で学ぶ長大生が立ち上がることに大きな意義があります。「海ゴミは人のせいにはしてはいけません。そのために僕らができることはやってみよう」という尾崎さんの一言が印象的でした。

# ながさき海援隊(水産環境科学総合研究科ほか) 海の漂着ゴミを 集めて分析し 環境問題を考える



海ゴミ調査時の様子。



ピースミュージアムでのギャラリートーク。



NPO/モッチの方々との海浜清掃。



漂着ゴミは素手でさわると危険な場合があるので軍手にゴミ挟みが標準的スタイル。「挿みのオレンジのユニフォームは、目立つ方が仲間が増えるかな、と思って…」と尾崎さん(中央)。みなさん、長崎市近郊の海岸の清掃状況はだいたい頭に入っているのだそうです。

# スマホを

# 使って学べる

# 平和学習教材



テキストが完成しているのは、原爆落下中心地や平和公園、被爆校舎が保存されている城山小学校など6地点。現在のパノラマ画像と、ほぼ同じ地点の被爆直後の写真がワンタッチで見比べられます。

被爆七十年を迎え、平和教育のあり方が問われている今、教育学部の学生が開発したのが、デジタル端末を利用した教材「どこでも学べる平和教育ぐるっと」。リーダーの上原和子さんのお話です。

「平和教育の地域差をなくすための教材ができないか」と思い、開発に取り組みました。タブレット端末やスマートフォンに無料アプリ「junaiio」をダウンロードし、テキストの写真にカざすとパノラマ画像や被爆直後の写真が表示され、音声解説を聞くことができます。教科書だけでははリアリティを感じられない遠隔地の子どもも、タブレットで被爆地を三六〇度見渡せることで興味を示してくれます」。

上原さんたちは全体の企画を立て、被爆経験者のお話を録画

自宅で親子でも学べる



配布テキストは、そのまま読んでも被爆の実相が学べ、小さな写真に端末をかざして使うこともできます。

アンターさん(仮名) U-30からはじめる長崎まちづくり会議(石嶺隼さん 環境科学部4年)

# キャンパスを飛び出し 市民コミュニティで活躍



初めて同士でも会話が弾むような手作りクッキーなど、アイデアも楽しいですね。

長崎市の繁華街に突如出現したイベント会場。主催するのは「U-30からはじめる長崎まちづくり会議」という、三十歳以下の若者で構成するまちづくり団体で、中心スタッフとして働く石嶺隼さんの姿がありました。

「今回のテーマはまちづくり×平和。これからの時代を担う若者同士で、ピースフルな街のアイデアを考えようという試みです。僕の役割は、会場設営やワークショップのファシリテーション。まちづくりと平和とって接点がないかと思っただけですが、参加した方々の自由な意見交換のなかから、面白いアイデアも出てきました」と石嶺さん。そもそも石嶺さんは、都市デザイン関連のまちづくり団体に長く所属しており、U-30

との掛け持ちをしています。

「景観デザインの仕事をすると父の影響もあり、まちづくりに興味がありました。大学での学びは事例調査が中心だったので、もう少しアクティブに動いてみたいと、長崎都市・景観研究所nouriに一人で飛び込んだのが一連の活動の始まりです。nouriは斜面地の住宅を提案する展示やイベントを行うまちづくり団体で、建築家や設計士など、現役の技術者の方々に採まれてポスター作りやイベントの手伝いをしています。その動きのなかで長大卒業生でまちづくりの先輩である岩本論さんを知り、昨年U-30にも参加しています」。

nouriの所長のお話です。「学生がまちづくりに関わることは非常に重要です。というのも、大学生もまちの大切な「市民」だからです。よく、まちづくりには「若者、バカ者、よそ者」が必要といいますが、それを網羅しているのが大学生。石嶺君は沖縄出身のよそ者ですが、その若さ溢れるノリで、たまには馬鹿になるくらい積極的に活動に関わってくれれば、三つの要素を持ち合わせています。分からないこと、やりたいことなどハッキリと意思表示ができ、やる気もある。彼の将来にとっても期待しています」。

大学で学んだことを実践しつつ、社会でネットワークを広げている石嶺さん。「現場に強い」という長大生のDNAは、こんな形でも受け継がれているようです。



彼を「U-30」に引き入れたのは、この日コーディネーターを務めた長崎大学卒業生の岩本論さん。在学中から活発にまちづくりに関わっています。



「長崎都市圏の総合デザイン専門誌」をコンセプトとした小冊子「ナガサキデザインニュース」も手掛けてきたnull。企画提案型の技術者集団のなかで、石嶺さんもしっかりとした存在感をアピール。



長崎大学をはじめ、函館未来大学、神奈川工科大学、法政大学、専修大学という五つの大学

### 電動車いす情報化プロジェクト (工学研究科)

が参加して毎年行われている新しい発想のアプリケーションアイデアコンペ「ミライケータイプロジェクト」。そこで本年度優勝したのが、長崎大学チームの企画「電動車いす情報化プロジェクト」です。実は、昨年の漫画コンテンツを利用して外国人観光客を増やそうというアプリ「Cool Japanimation」に続いて二年連続の快挙なのです。審査をしたのはNTTデータやソフトバンクなどの企業数社と、コンペに参加した学生全員。

# 走行する道路の情報をビッグデータ化するアプリの開発

チームメンバーが交代で車いすに乗りながら文教キャンパス周辺の道路を走行。横断歩道や踏切の渡りやすさも重点的にチェックしました。今後は実際のユーザーを巻き込んだ展開にするのが課題だそうです。左後列から小林先生、立石拓也さん、川野智裕さん。前列 園田絵さん。



選ばれた「電動車いす情報化プロジェクト」は、電動車いすに装着した各種センサを利用して、電動車いすで走行可能な経路やスムーズな路面、逆に不便な段差や行き止まりなど、操作や走行に役に立つ情報を集めてビッグデータ化する機能を持つアプリの開発です。優勝した企画は、五大学で役割分担して一年間かけてソフトウェアの開発をするという大掛かりなものです。

企画に関わったのは大学院工学研究科、小林透教授の研究室の学生を中心とするメンバー。「頭で考えるより、まずは自分

たちで体験してみたほうがものになると思い、電動車いすを借りてキャンパスのなかや大学周辺の道路を走ってみました。「エレベーターにぶつかったり、上りより下りが怖いことを実感したり、ちょっとした傾斜でバランスを崩すことなどがわかりました」。そういった体験を重ねたうえで、不便さを解決するためにどんな情報が必要かという切り口で考えました。「これまで福祉と工学の接点は、車いすなどの操作の補助が中心でしたが、ソフトウェアと車いすの融合が新しい発想だと受け止められたようです」と皆さん。また、同じ小林研究室の一貫坂駿介さんは、車いすにカメラ

を取り付けて撮影し、その画像が簡単に更新できるストリートビューのようなシステムを研究中。どちらも車いす利用者が情報の使い手だけでなく発信する側になることで、日常生活のモチベーションアップにもつながりそうです。「ビッグデータが

オープンになるにしたがつて、人にとって役に立つ情報を抜き出す技術や知識のニーズが急速に高まっています。しかしIT業界ではシステムを構築する人が足りません。今後は自由な発想を形にしていけるエンジニアを育成していきます」と小林先生。



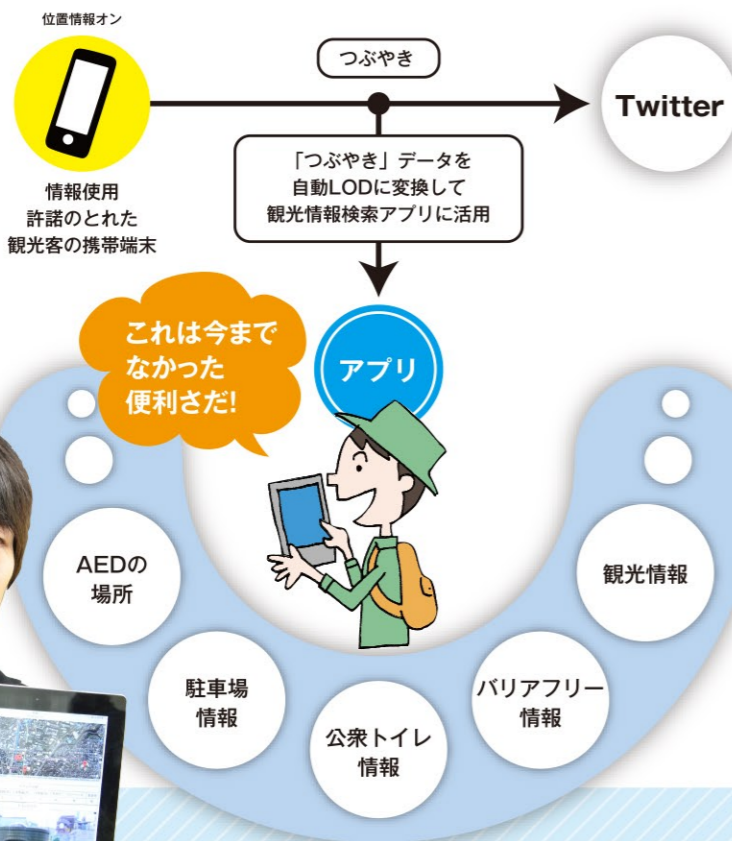
## LODと観光情報のリンク(工学研究科 磯野祐太さん)

# 施設情報や観光地でのつぶやきを有効利用

この「ミライケータイプロジェクト」の昨年度の優勝チームの中心でもあった磯野祐太さんは、現在、小林透教授の元で別のプロジェクトを進めており、先日地元紙で大きく紹介されました。「人に役立つ既存のデータをLOD(Linked Open Data)に変換して、長崎県内の観光情報の検索アプリとつなげようというシステムです。手元のスマートフォンやタブレット端末で呼び出した最新マップから、AED(自動体外

式除細動器)が設置してある場所の情報を入手したり、公衆トイレの情報を調べたりすることが出来ます。例えば、そのトイレに駐車場があるかどうか、バリアフリーな手すりの位置などの条件からも検索できます。本システムは、コンピュータがデータの意味を理解できるセマンティックWeb技術により構築されているため、必要な条件に合わせて、しかも更新された最新の情報を入手できます」。

そのほか、観光地や映画のロケ地を実際に訪れた外国人観光客が自国語でつぶやいた言葉が、本国で長崎や映画に興味を持つ検索した人の画面にも現れるしくみも面白い! 軽々と言語の壁を越えるデジタルデータの優位性が生き、インバウンドにも活用できます。「長崎は他県と比べて観光のポテンシャルが高く、また行政の方々も協力的なので、いろいろな可能性が考えられます」と磯野さん。今後は防災分野などにも応用が広がります。



ながさきビッグデータ研究会でも発表した磯野さん。県内でも初めてのシステム。



# 『せっけん王子』で手洗い

「でんでらりゅうばでくるばつてんりつ」長崎のわらべ歌に合わせて指の間や爪の先まで石鹸でゴシゴシ。子どもたちに正しい手洗いの方法を教える出前教室が、医歯薬学総合研究科の大学院生たちによって行われています。実施するのは「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」の学生の皆さん。代表の吉原圭亮さんのお話です。

光塗料で汚れを浮き上がらせま  
す。「うえーっまだ汚い！」と  
どよめく子どもたち。かぶりも  
のをした「せっけん王子」が手  
洗いクイズを出題、最後は歌に  
合わせて正しい方法を実践とい  
うワークショップ形式。当初は  
手弁当だったものの、塗料や準  
備に費用がかかることから(夢  
の架橋)に応募して採択されま  
した。

「私たちは日頃、研究室にこも  
りっきりになりがちなので、外  
に出て子どもたちと触れ合える  
のは気分転換にもなります。日  
本人学生が中心だったのです  
が、共に学ぶ留学生も参加する  
ようになりました。日本の教育  
現場を見学できるチャンスだと  
みんな言います」と今西望さん。  
なかには、帰国したら同じ  
プログラムで教えたいという

ベトナム人留学生も。長崎大学  
生まれの子どもプログラムが、  
そのうち海外に活用されること  
になると嬉しいですね。

「みんな正しい手洗いは頭でわ  
かっているけど、実際にはいいか  
げんなもの。しかし感染症予防  
の基本中の基本なのです。それ  
を学んできた僕らが子どもたち  
に直接教えることで、社会に還  
元できるのではないかと考えま  
した」。

「私たちは日頃、研究室にこも  
りっきりになりがちなので、外  
に出て子どもたちと触れ合える  
のは気分転換にもなります。日  
本人学生が中心だったのです  
が、共に学ぶ留学生も参加する  
ようになりました。日本の教育  
現場を見学できるチャンスだと  
みんな言います」と今西望さん。  
なかには、帰国したら同じ  
プログラムで教えたいという



夏休みに東京霞が関にある文部科学省の子どもイベントにも招かれ、長大のプログラムには400組もの親子が参加しました。



みんな、いつも  
どんな時に  
手を洗うかな？



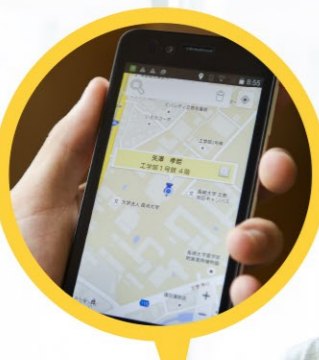
「せっけん王子」は毎回子どもたちに叩かれて壊されるので三代目なのだそう。インフルエンザが流行する季節の前に、また出前教室を計画したい、とメンバー。

世界保健機関(WHO)推奨の手洗い手順を『でんでらりゅう』や『ようかい体操』に合わせて行えばバッチリ完璧！留学生も歌えるようにローマ字表記なのが面白いですね。



## 迷ったらスマホで ベストアンサー

キャンパスナビアプリ開発(工学研究科ほか)



大学構内で学外の人から道を  
聞かれても、答えられなかった  
経験を持つ学生たち。そこでベ  
ストアンサーが導き出せる道案  
内アプリを開発中なのが、この  
チームです。代表は松尾幸祐さ  
ん。「モバイル端末で専用アプ  
リをダウンロードすることで  
キーワードから場所を特定で  
き、正しく案内できるようにな  
ります。現在は学部内の詳細な  
情報を足で集めつつ、地図内の  
緯度や経度等の座標軸を入力し  
ています。本当は全部完成して  
からお披露目するのがいいので  
すが、逆に途中で一般公開した  
ことで、外部の方々から地図の  
見やすさへの助言をもらっていま  
す」。工学部から範囲を拡大し  
ながら試行錯誤は続きます。

「役割分担している  
ので、変更情報を共  
有しながら進めるな  
ど、プロジェクト推  
進のノウハウも学ん  
でいます」と松尾さ  
ん(中央)。他大学の  
女子学生も入り、プ  
ログラミングだけだ  
なくアプリのデザイ  
ンや広報も工夫して  
います。

全国で四〇〇チーム以上が自  
作車両で燃費を競う「ホンダエ  
コマイレッジチャレンジ大会」  
に挑戦してみようというのがモ  
ノづくり倶楽部。代表の小原貴  
也さんは言います。「僕たちは、  
構造工学を専攻し、建築や車に  
ついて、その理論や設計などを  
中心に学んでいます。将来は  
メーカーの技術職に就く可能性  
もあるため、在学中に理論を実  
践して実際にモノを作ってみた  
いのです」。しかしゼロからの  
車両製作は予想以上にハードル  
が高いことがわかりました。そ  
こで、大会参加常連の企業や工  
業高校に見学に行きながらの  
ディスカッションが続きます。  
「まずは車。そのうち飛行機な  
どもにも挑戦できればいいです



大会では自作車両で燃費を競います。「俺らが勉強しているトラス構造と同じなのがこれ」「でも重くなるんだよ。あっちのハシゴ型フレームがいいんじゃないか？」と議論を重ねる面々。一番右が小原さん。

モノづくり倶楽部(工学研究科構造工学コース)

## エコカーの

## 全国コンテストに

## チャレンジ

長大バリアフリーマップ制作  
(教育学部特別支援教育コースほか)



# 手分けして 車いすを押しながら チエツク

「次の講義まで十分。キャンパス内をどう移動するのがベストか」。車いすの友人が苦悩するのを見て、バリアフリーマップの必要性を感じたという五反田明日見さん。教育学部の特別支援教育コースの四年生です。「『個』についての支援が社会全体に繋がっていくと学びました。ならば大学でも実践できます。キャンパスには増設された講義棟が多く、棟と棟のつなぎ目や入り口には段差が付きもの。でも、スムーズに入りやすい出入口はココという情報がマップで事前に分かれば、行動計画を立てやすい。本人も介護者も心理的な負担が減られます」。実際に構内各所で行った調査では、問題点も発



障害学生支援室の呼びかけで、経済学部や多文化社会学部の学生もボランティアで参加。エリアを手分けして学内調査を行っています。



上の月と星は「長大ハラール」のマーク。月はイスラム教、星はなんと長崎市をイメージ。考案したのは医歯薬学総合研究科の嶋田聡さん。「ハラールとは、ムスリム（イスラム教徒）にとって望ましいとされる食や生活の規約。ムスリム留学生にとって日本での食生活は大変です。そこで、生協でのハラール認定アイテムの導入に始まり、スーパーや飲食店など、ハラールの情報を集めてウェブで共有します。最終的には長崎全体に広げられれば良いですね」。子どもの食アレルギーの診療をしていた嶋田さん。食に関する不安を払しょくし、日本でも食べることの楽しさをムスリムの留学生に味わってほしいという想



左が嶋田さん。右はチャー博士。「留学生の出身国の1/3がイスラム圏で、現在は60名ほどですが、今後増えるでしょう。学内の情報や施設整備は必要不可欠です」。



# 「チエンジ」への 熱い想いを表現し、 自身もチエンジ!

学生プレゼン大会で最優秀賞(佐原慈佳さん 薬学部1年)

「世界にはかえりみられない熱帯病（NTDs）が存在します。流行地域には貧困層が多く、薬が売れないことから新薬が開発されないので。しかし、命に格差をつけるのはおかしいと私は思います!」。ステージから観客席を見据え、強く主張する佐原慈佳さん。七月に行われた学生プレゼンテーション大会は、留学生をふくめた学生たちが英語や日本語でプレゼンをするもので、予選を勝ち抜いた六名が競う決勝大会において、佐原さんが最優秀賞を受賞しました。



想いは口にするのが大切!

「高校時代に原稿を丸暗記でプレゼンをしたのですが、まったくウケなかった苦い思い出があります。苦手意識を克服するため、NICKEYキャンパスプログラムでプレゼン力を学ぶうち、大会の存在を知りました。中

学生のころ、授業で発展途上の医療格差を知り、創薬に関わる夢をかねたたくて薬学部へ。大会テーマ「チエンジ」に自らの夢を重ねて「世界を変えたい!」と訴えました。指導している地域教育連携・支援センターの矢野香助教のお話です。「佐原さんの場合、当初は自ら調べた病気の症状や感染経路の話が主体の研究中心の発表になっていたため、何度も構成やテーマを考



決勝のプレゼンではいすに座った状態で挑戦した佐原さん(上)。今年で2回目となる学生プレゼンテーション大会「GET(Global Entertainment Training)」は、長崎県内の10の大学と短大が連携して取り組んでいる「長崎発グローバル人材育成プログラム」の一環です。

# サークルの星!

長崎大学サークルのなかでキラッと光るサークルや活躍する学生をクローズアップ!



キャプテンの人柄のおかげで自由にやれます!

## 全学サッカー部

### 天皇杯予選で決勝へ。秀総一郎さんが優秀選手賞

今年6月に行われた第95回天皇杯の県代表選手権で決勝まで進み、惜しくも三菱重工長崎に敗れた長大サッカー部。Jリーグ経験選手を含む社会人チームを相手に3対1と健闘しました。主将の濱崎翔太さん(左)のお話です。「本当は勝てた試合という実感もあり、試合後モヤモヤが残りましたね。社会人チームには技術や試合運びではかないませんが、体力的には僕らも負けない。今後の課題の残るゲームでした」。しかし、ゴールキーパーの秀総一郎さん(右)が優秀賞を獲得しました。「前半押し込まれる場面を1点で抑えたことが評価されたのでしょうか。でも、Jリーグ経験者のシュートの威力や伸びはすごい! 遠くから狙ってくるので気が抜けず、いい経験になりました」と秀さん。

月曜日以外は毎日練習というサッカー部。「決勝に行けたのは今年のチームの力だけでなく、先輩たちの積み上げてきたものがあってこそ」と謙虚な一言。

夏休みこそ! 練習三昧です!



## ヨット部

### 夏の合宿、ランチ以外は海の上

海が近い九州は全国でもヨット人口が多く、競技のレベルも高いといえます。そんななかがんばっているのが長大ヨット部。昨年は全国大会の団体戦で上位の成績を取った選手もいます。ヨット競技はいろいろな種目がありますが、基本は一定距離の往復で、ゴール順のポイントを競うもの。艇をいかに自在に操るかが勝敗のカギを握ります。特に2人乗りの場合は、息を合わせるために長時間の練習がものを言います。

ヨットを取る艇庫が大村湾を望む時津の長崎大学臨海研修所にあり、ヨット部の夏は1日海の上なのだそう。副キャプテンの姉川郁子さんにお聞きしました。「通常は週末しか練習できないのですが、夏休みや冬休みは週5日は海に出ます。朝から夕方まで練習し、昼ごはんだけ陸に上がるという感じですね。艇庫のそばの合宿所で寝泊まりしながら1日中いっしょにいるので部員同士の絆は強まりますよ」。部員募集中で初心者でも歓迎だそうです。

## 剣道部女子

### 2年連続全国大会へ。さて今年は??

一昨年、昨年と続けて全国大会に出場している剣道部女子。支えてきたたくさんの4年生部員が卒業したことで今年度の部員は5名。試合へはフルメンバー、補欠無しで挑んでいます。今年も全国大会をめざし、週5日は体育館の武道場で汗を流す毎日。

「他大学は、全国から強い選手を引き抜いてメンバーを構成することもあります。うちの部の場合、普通に小学生や高校生のときから剣道を始めた人ばかりです。それでも、ご自身でも道場を持ちながら毎日通ってくださる石原一郎コーチ(左)の熱心なご指導や応援して下さる先輩がたのおかげで、成果は上がっています。士気は高いですよ」と主将の重野遥さん。今後の活躍も期待できそうです。メンバー募集中!



1人ひとりの役割をしっかりと果たします!

## 囲碁同好会

### 清水健吾さんが学生本因坊戦九州代表に!

第59回学生本因坊決定戦九州地区予選で勝ち抜き、九州代表となった清水健吾さん(薬学部2年)。秋田県能代市で行われた全国大会では健闘したものの、惜しくも敗れました。

入学時、大学に囲碁のサークルがなかったことから5人の仲間と同好会を立ち上げた清水さん。現在は10人が在籍しています。「囲碁は盤上に性格が出るのが面白いですね。僕は子どものころからやっていますが、負けが込んで囲碁から離れたことも何度ありました。高校になってゼロから取り組むようになって、今は後半に勝負する自分の形ができています」。

時間と闘いながら相手の手の先を読む、頭脳戦とも言われる囲碁の世界。一度、ギリギリの攻勢で勝負した対局後に頭が痛くなったことも。薬学部ではこれからハードな実験が増えてきます。「粘りや体力勝負となれば囲碁で鍛えた精神力が少しは役に立つかもしれません」。

全国では僕はまだまだ新参者です





英語を学ぶというより  
英語で何を学ぶのか

長崎大学の各学部の最新情報を紹介していく「長崎大学のいま!」。最終回は多文化社会学部です。長崎大学待望の人文社会学系の学部として平成二十六年にスタートを切りました。

佐久間正学部長のお話です。「多文化社会学部は今年度で二年目、早くも優秀な学生たちが育ちつつあります。」

現代は文化的な背景を異にする人々が交わらなければいけない多文化状況が広がっています。近年、長崎でも日常的に外国人に接することが多いですね。客船で訪れるアジアの観光客は街にあふれ、三菱長崎造船所関連のワーカーとして東欧やロシアからたくさんの方々が来崎して働いています。少子高齢化が進む日本では、外国から労働力を入れなければ立ち行かないヨーロッパではすでにそういう

状況になっていますが、問題も多い。文化的他者とともに働き、生活し、仕事上のパートナーシップやリーダーシップを発揮する人材が、世界中で求められているのです。」

多文化社会学部では、入学試験時に一定レベル以上の英語力が求められ、それを突破して入ってきた学生たちも最初の半年間に英語を集中的に学ぶと聞きました。

「はい、一年次前期はトランジションプログラムで徹底的に鍛えるので学生たちは大変ですが、平成二十六年度は、一年次前期のTOEFL ITP 四八四点が後期で五一五点(いずれも平均)と、確実に力がついていきます。短期の留学が全員必修で、六ヵ月以上の留学が必修であるグローバル社会コースの専門科目はすべて英語での授業ですし、オンライン特別コースはライデン大学への一年間の留学も設定されており、高い英語力は必須です。ただ、英語は入口。海外でのビジネスでは英語が流暢に話せることよりも、人としての品格や教養が重要視されます。そのため、英語学修に止まらず、国際法・国際政治、文化交流(史)、社会学、日本学関係など多彩なカリキュラムを設定しています。」

長崎大学のいま!

多文化社会学学部

文化が異なるなかでも  
たじろがない  
しなやかな人材を育てたい



佐久間正

多文化社会学部長

さくまただし  
長崎大学多文化社会学部教授。一九四九年生まれ。一九七五年東北大学文学部史学科日本思想史学卒業。一九七九年東北大学文学研究科国語国文学部日本思想史学専攻修士課程修了。博士(文学)。一九九六年より一年間エジプト・カイロ大学でも教鞭をとる。二〇一四年より現職。専門は日本思想史。著書に『徳川日本の思想形成と儒教』(へりかん社)などがある。

本年度から、この学部の一年生全員が国際学寮ホルテンシアに入寮し、留学生との共同生活が始まりました。長崎大学としては新しい試みですね。「そうです。授業とは別の生活の場で多文化状況を受け止めるしくみです。毎日の生活のなかでコミュニケーション能力や適応能力を高め、多文化状況でもたじろがない力がつくことを期待しています。」

大学院構想を念頭に  
発信力を高める

大学院構想についてお教えください。「多文化社会学部では、平成三十年四月をめどに大学院の設置を構想しています。一つの柱は日本学を英語で発信できる、逆に世界から日本学の研究者を受け入れられる場を作ろうとい

うものです。また、研究者に期待するのは、多文化状況の、いわば生理現象と病理現象の解析です。病理ともいえる人種差別や異文化排斥はどうして起こるのか。一方で、そういうものを乗り越えて互いの理解を深めながら共に生活して働いている状況があります。特に、うまくいっている事例をしっかりと捉え、これを発展させるにはどうしたらいいかといった方法論を探求します。そのために理論的探求や、さまざまなフィールドワークのできる研究者を増やしていきたい。」

また、これからは領域的国民国家の枠組を超えていくことは大切で、人文系のアカデミアが果たせる役割は大きいのではないのでしょうか。「早くも学部としての紀要も発表。教員も著書を続々と出版するなど、発信力も高まっています。」

す。二年目となり、学生の動きも活性化してきましたね。「国連NPT(核不拡散)再検討会議に派遣されたナガサキ・ユース代表団十二名中、多文化社会学部からは三名が出ました。第一線で活躍する方々の講演会では積極的に質問して議論に参加しています。先日は学生たちが学部紹介ビデオを作成し、高校生に大変好評でした。学生たちは、この学部の特徴を理解して撮影から編集まで自分たちで行いました。先輩が存在しない新しい学部だけに、必要なものは何でも自分たちで立ち上げようという気概があり、実に頼もしいですよ。」

新しい学部ならではの試行錯誤を重ねながら、教員も学生も一体となって成果を出し始めた多文化社会学部。グローバル化が進む世界のなかで活躍できる人材が少しずつ育ちつつあります。



フィールドワークの報告会のようす。それぞれの体験を語りながら盛り上がる学生たち。



1年生は全員、この国際学寮ホルテンシアで留学生と1年間の共同生活を行います。

# 着眼点は自分次第 フィールドワーク実習

**多** 文化社会学部では地域での調査技術を磨くフィールドワーク実習を重視しています。現在、二次次の学生が離島を含む長崎県内各地を訪れ、実習の真つ最中。そのなかの一つ、民俗学を専門とする才津祐美子准教授のゼミでは、毎年、長崎市飯香浦町の地蔵まつりに学生を連れていきます。

「ほぼ最初の現地調査なので、まずは自由に自分の着眼点を見つけてから始めます。祭りの主催者に継承問題を聞く学生、訪れる人々の様子を観察する学生、隣接する地域の祭りとの



祭りの変遷や飾りの材料・作り方など地域の人たちにインタビューしながらの作業は貴重な体験に。



そうめんを編んで飾る珍しい飯香浦町の地蔵まつり。見学していると「手伝って!」と言われ、見よう見まねでお手伝い。

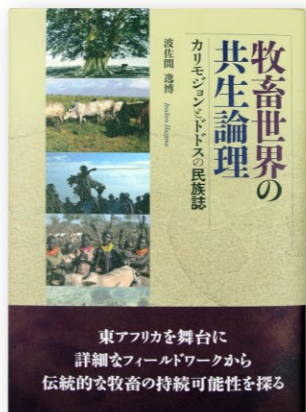
の比較をする学生、さまざままで「すね」。事前学習として先行研究に目を通し、予め質問を考えた上で現地調査。調査の結果、新たに生まれた疑問は後日掘り下げるといふ一連の流れのなかで才津先生が特に気をつけているのが、調査地との関係。「調査中に失礼のないふるまいをすることはもちろんですが、調査後にきちんと成果をまとめて現地にフィールドバックすることも欠かせません。学生には必ずお礼状も書かせます」。それらを

毎年繰り返すことで、信頼関係を築いてきました。今年の調査報告会ではその点に着目し「自分たちが飛び込みで調査できるのは、これまで先生方が築いてきた繋がりのおかげ」と指摘する学生も。当初はおっかなびっくりだった学生たちも、現場で地域の人々と触れ合うなかで調査の面白さに目覚めていくようです。フィールドワーク関連科目は一年次からの必修。選択科目として海外での実習も用意されています。

# 教員一人が著書を出版

**教** 員もそれぞれの研究分野で多彩に活躍しています。今年はずでに二人が著書を出版しました。地域生態論が専門の波佐間准教授は、『牧畜世界の共生論——カリモジョンとドドスの民族誌』（京都大学学術出版会）を出版。足かけ六年にわたり、東アフリカのウガンダで行ったフィールドワークをまとめたものです。「テントを張って牧畜民と寝食を共にしました。サブナでの生活を一から教わるなかで、牧童と家畜の濃密な相互コミュニケーションに驚かされました。内戦を含む政治的背景から、牧畜民は粗暴であるといった誤解を解くために、きちんと研究をまとめて発表し始めたので

「は一九九〇年に社会主義から解き放たれたモンゴルに急速に広まったキリスト教福音派の的を絞った一冊です。「グローバル社会を読み解くとき、「越境」という言葉がよく使われます。言葉の壁、民族の壁を越えるとき、意識や概念はどう変化していくのかを聖書翻訳の分析を通して明らかにしました」。どちらの著書も文化について考えさせられる深い洞察があらわれています。



波佐間先生の著書



滝澤先生の著書

# 一〇〇%学生自主制作の 学部紹介ビデオが話題

**七** 月のオープンキャンパスの際、集まった多くの高校生が興味津々で見入ったのが多文化社会学部の学部紹介ビデオ。実はこれ、多文化社会学部の学生委員会が企画・脚本・撮影・編集をした自主制作ビデオなのです。中心となった中村優平アクバルさんのお話です。

「高校生は僕らが作ったとは知らず、素直にウケてくれたのが嬉しかったですね。写真や画像も学部学生全員が協力して提供してくれたので制作期間は二週

間。集音マイクなど専用機材が買えなかったために音声が入りにくかったのが今後の課題です」。ビデオ内で仲間同士らしくリラックスした表情で学内を案内するのは、日本だけでなく中国・韓国・オランダの学生たちと国際色豊か。いろいろな国の言葉が飛び交っているキャンパスの雰囲気とともに、国際学寮ホルテンシアでの食事作りの様子など、生き生きとした場面がテンポよく続く傑作です。



左が中村優平アクバルさん。昨年、ボランティアで参加した大村湾の環境プロジェクトで学んだ映像技術が、さっそく役立ちました。右の大日方エイミーさんは「先輩がいらないから自分たちでやるしかないもね!」とにっこり。

# 入学四カ月で挑戦する 英語プレゼンテーション

**大** きな講義室に一年生全員と公開講座に訪れた高校生の見学者や教員がぎっしり。ここでの壇上で行われるのが恒例の別英語プレゼンテーション大会。一年次の教養ゼミナールの最終報告会を兼ねており、いわば前期の学びの総まとめ。一年生は入学して四カ月で早くもこんな大舞台にチャレンジす

るのです。それも学術的・社会的意義を十分に備えた研究計画を立て、先行研究を踏まえた調査を実施し、その結果を聴衆を惹きつけるプレゼンテーションの形で発表するという本格的なもの。各班が取り扱うテーマは「ポイ捨ての心理」から「カクレキシリタン」「飲酒コミュニケーション」など多岐にわた



単なる発表ではなく、調査研究の要素をクリアしなければいけない学術的なもの。パワーポイントも練りに練ったものでした。

り、発表後は聴衆からの容赦ない質問（英語の場合もあり）にも即答させられ厳しく採点されました。この日は三班的「Trick of Love」の「Trick of Love」の集約のほか、過去の漫画をリサーチして恋愛に至るメカニズムや男女差を浮き彫りにしました。



最高得点を取った3班。メンバーはそれぞれ高校時代の制服を着て登場し寸劇風の展開も大盛り上がり。指導した小松准教授は「英語プレゼンは、朗読調になりがちなので、観客に話しかけるように語ることを意識させました。制服は彼らのアイデアですよ」。

## 伊藤園「おいしいお茶」に「摘みゴロウ」が貢献

日本のコンビニエンスストアの棚の一面を独占して飾られている飲料水の数々。真夏の暑い日には特に、涼しげな色で彩るお茶の飲料水が一気に喉の渇きを解消してくれそうに誘惑する。今や手軽にコンビニなどで購入できるこのような緑茶の元祖は、一九八五年、飲料水の大手の伊藤園が出した世界初の緑茶飲料「缶入り煎茶」の登場から始まったと言われる。まだ一般的にはお茶が飲料水として位置づけられてなかった時代である。しかし、一九八九年からスタートした「おいしいお茶」のブランドと商品の質が、このような消費者の感覚を変えてしまったのである。

長崎大学は二〇〇四年から「おいしいお茶」の飲料水メーカーである伊藤園と、ICT技術を駆使して茶葉を管理するための共同研究をスタートさせた。そして十年余りの研究期間を経て、ICT技術で「おいしいお茶」の茶園を管理するICTカメラとそのシステムを開発し、全国各地の茶園農家を対象に設置を開始している。

ICTはInformation and Communication Technologyの略字で、情報通信技術を指す。

のクロロフィル反応が見事に現れる第四の色「近赤外」の動きに着目している。一般的に近赤外線の情報デジタルカメラからしてみれば邪魔な雑音として扱われている。綺麗で鮮やかなカラー写真を生成するためにこの邪魔者を取り除く必要がある。高級カメラには必ずこの邪魔者をカットする専用のフィルターが取り付けられている。しかし、お茶の美味しさを数値化するには何とこの「邪魔者」が「立役者」として生まれ変わるのである。

## クロロフィル反応の誤差を補正するシステムの開発

お茶の美味しさを数値化したICT技術

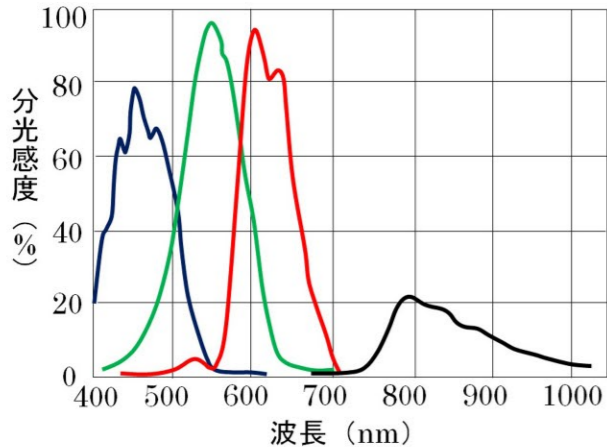


図1 お茶の美味しさを数値化するためのセンサーの分光感度特性

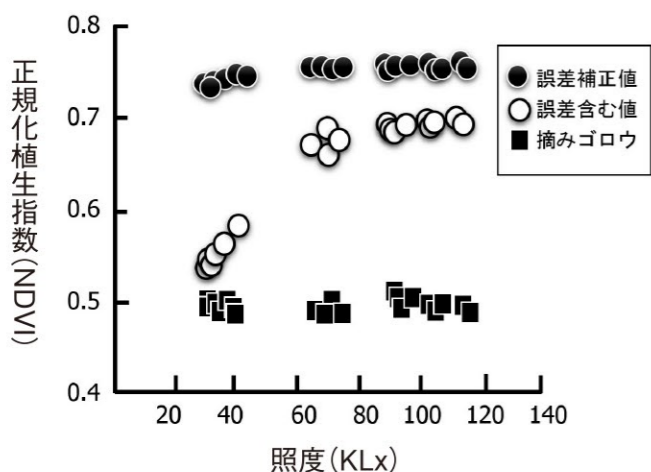


図2 摘みゴロウに採用されたセンサーの補正手法の実験結果

す。今や人間社会の基盤を支える情報技術の総称でもある。人間の感覚を重視した時代を「アナログ時代」と称するならば、コンピュータの感覚を重視した時代のことを指して「デジタル時代」と呼ぶ。人間の感覚では「美味しい」と「まあまあ美味しい」の区別がなかなか難しいが、コンピュータの感覚ではとてもシンプルで簡単。「美味しい1、美味しい2、美味しい3」といった形で「美味しさ(新芽の熟度)」を数値化してしまえば良い。お茶の美味しさも数値化することができれば、ICT技術でお茶の茶園管理ができるかもしれない。これがこの研究の始まりである。

二〇〇四年から長崎大学と伊藤園は、静岡、沖縄、宮崎などの茶園を研究対象とし、一番茶から三番茶までの茶葉の美味しさを測り続けて美味しさのデジタル化にチャレンジしてきた。そして完成したのがTeaSystem。愛称としては「摘みゴロウ」「sunigorou」と命名した。そして二〇一五年八月現在、宮崎県の都市には既に四箇所の茶園農家に茶園管理システムとして設置・運用を開始している(写真左下)。

## 茶葉の美味しさのカギは第四の色「近赤外」

自然と生き物を対象とした研究には時間と忍耐強さが求められる。茶園を取り巻く厳しい自然環境はお茶の美味しさを簡単にデジタル化させてくれない。季節の特性、太陽の高度・雲量の多少、デジタル機器の特性など、考慮すべき項目は多種多様に

の目玉のもう一つは、システムの数値化のための補正手法にある。お茶の美味しさを数値化する際に用いるバロメータの一つはNDVI(Normalized Differential Vegetation Index、正規化植生指数)である。これは近赤外線のとくに特徴的に現れるクロロフィル反応を正規化するための指数であるが、様々な自然環境の変化がある中で生じる誤差の処理は非常に難しい。この誤差が除去されなければ正確なお茶の美味しさが数値化できないのである。図2は本研究により開発されたNDVIの補正手法の研究結果である。図からも明らかのように、補正前は照度に影響され、一定になるはずのNDVI値に大きな誤差が生じている。しかし、補正手法を適用した後は、ほぼ一定

# 茶葉の摘みごろを 見張つて知らせる テクノロジーの開発

上る。これらすべてをクリアして完成したものが「TeaSystem. 摘みゴロウ」である。

お茶の美味しさを数値化したICT技術の目玉の一つは、近赤外線の情報やその強さを数値化したところにある。携帯電話やスマートフォンなどに当たり前のように付いているデジタルカメラは、可視光線の強度と強さを「青」「緑」「赤」の三色で分けて数値化し、鮮やかなカラー写真を作り出している。それに加えて、人間の目には見えないが茶葉のような植物の分光特性を見事に感知する近赤外線の情報も、第四の色に追加して数値化することで、お茶の美味しさが見事に数値化されるのである。図1は「TeaSystem. 摘みゴロウ」のために採用されたセンサーの、「青」「緑」「赤」「近赤外(黒色)」の四色の分光感度をパーセントで示したグラフである。お茶の美味しさを数値化してくれる情報の秘密は、植物

のNDVI値を保っていることが見て取れる。特に一番茶から三番茶まで(四月から八月まで)の厳しい自然環境の変化に耐えるシステムの構築には、欠かせない技術(特許)の一つである。

「TeaSystem. 摘みゴロウ」の現地での設置運営には、まだ最終的な調整が必要であった。それは茶園農家のために開発した「摘みゴロウ」を設置・運営するための実験機の製作と機器の最終チューニング作業である。二〇一二年から二〇一三年までの二年間にわたって行われた、都城市の茶園を対象に実施された実験機の設置と最終チューニング作業の結果、お茶業界として満足できる「美味しさ(繊維)」と「数値化(NDVI)」の相関関係(R<sup>2</sup>=0.76)を実証した。

美味しいお茶のための茶園管理には熟練したお茶職人が必要である。お茶の専門職人によりその感覚を覚えさせたICT技術者の「TeaSystem. 摘みゴロウ」が、お茶職人に代わって美味しいお茶作りの立役者になってくれることを願ってやまない。

## 自然環境の変化に対応する 熟練したお茶職人の感覚を求めて

Text by Jun Byungdug



都城市の瀬茅地区の茶園の様子と「摘みゴロウ」。

### 全炳徳 教授

長崎大学教育学部教授。長崎大学大学院海洋生産科学研究科博士課程を修了(工学博士取得)後、長崎大学工学部講師に、その後株式会社ベックの技術開発室長、長崎大学教育学部助教授、准教授を経て、二〇〇八年より現職。専門は写真測量とリモートセンシング。その他、ICTを活用した教育現場での「平和教育」教材開発などを手がけている。



いまある状況の中で、何が問題なのかを自ら探り、その問題点について、自身の力で考えながら取り組み、解決していく能力。いわゆる課題探究・問題解決能力が、グローバル化した社会では、ますます重要視されています。解決に向けてのプロセスは何通りもあり、必ずしも解が1つとは限りません。

長崎大学では、教養科目、専門科目における知識の修得はもちろん、アクティブラーニングを通じて、課題探究・問題解決能力を身につけるためのカリキュラムが用意されています。今回の特集では、課題探究・問題解決能力をいろいろな場で実践し、発揮している学生諸君の取り組みを紹介いたしました。受験生の皆様も、のびのびと楽しく活動している先輩たちの姿を見れば、きっと長崎大学への魅力が一段と増すことでしょう。

久々の「大学の研究最前線」は、身近な「お茶」に関するとても興味深いテーマです。  
(原田 哲夫)

[編集・発行]

Choho企画編集会議

編集長

原田 哲夫 広報戦略本部副部長  
工学研究科 教授

副編集長

池田 幸恵 多文化社会学部 准教授

編集委員

- 堀内 伊吹 副学長、教育学部 教授
- 山口 純哉 経済学部 准教授
- 相楽 隆正 工学研究科 教授
- 松下 吉樹 水産・環境科学総合研究科 教授
- 小林 信之 医歯薬学総合研究科 教授
- 堀尾 政博 熱帯医学研究所 教授
- 佐々木 均 病院 教授
- 西田 憲司 やってみゅーでスクマネージャー
- 深尾 典男 副学長、広報戦略本部副部長 教授
- 石田 亮二 広報戦略本部 主査
- 高藏 祐亮 広報戦略本部 主任
- 井上 泉 広報戦略本部 主任
- 尾中 紀夫 広報戦略本部

編集 川良 真理  
デザイン 三浦 秀樹  
企画編集アドバイザー 浅野 眞

TEL.095-819-2007  
FAX.095-819-2156

(E-mail)

www\_admin@ml.nagasaki-u.ac.jp

[発行日]2015年10月1日

プレゼントクイズ

長崎大学 通 クイズ

長崎大学に関する、知る人ぞ知る新事実が続々登場するクイズです。さあ、あなたはどれが本当だと思いますか？

世界遺産登録で話題のグラバー邸のあるグラバー園。その園内に、経済学部の前身、長崎高等商業学校の、ある建物が移築保存されています。それは何でしょう？

ヒント：グラバー園の地図にも記されています。

資料倉庫



1

表門守衛所



2

寮生用食堂



3

解答は挟み込みのハガキにご記入のうえ、郵送してください(アンケート内容も併せてご記入ください)。正解者のなかから抽選で5名の方に長崎県産品をプレゼント!

前号の答え

Q 長崎大学の医学部保健学科には作業療法の授業としてある芸術が取り入れられ、最新設備もあります。それはなんでしょう。

A ③ 陶芸のための電熱窯

これは、基礎作業学技法という講義で使用するものです。保健学科の東登志夫教授によれば、陶芸は子どものころに経験した土いじりに共通した触覚が刺激されることから作業療法の一つとして有効とのこと。学生も熱心に取り組み、アトリエには作品も並んでいます。



今回のプレゼント

コラーゲンが豊富に含まれた本マグロの胃袋を使ったヘルシーな「漁師まかないカレー」は、第46回長崎県特産品新作展水産加工品部門で優秀賞を受賞しました。こちらを、幻の肉と称される長崎五島列島の五島牛のA3~A4クラスのバラ肉だけをたっぷり使った贅沢な「五島牛カレー」とセットにしました。今回は正解者のなかから10名にこの贅沢なカレーセットをプレゼント。



鮎色に炒めた玉ねぎをベースに10種のスパイスをきかせたルーが味をひきたたせます。2食セットで2,376円(税込・送料別)。

提供/ MANAMIオリジナル(新上五島町) TEL.0959-46-2578

長崎県物産館 TEL.095-821-6580 [http://www.e-nagasaki.com/contents/n\\_bussan/](http://www.e-nagasaki.com/contents/n_bussan/)

\*「長崎よかもんショップ・四谷」好評営業中(長崎県東京産業支援センター1F)

10月18日

第13回ながさき水産科学フェア

~体験!発見!不思議だらけの海の世界~



お魚解剖に海藻麵づくり体験、練習船公開に研究者によるサイエンスカフェなど家族で楽しめるイベント盛りだくさんのながさき水産科学フェアが、今年も行われます。これは、長崎市多良良地区の長崎大学環東シナ海環境資源研究センターが、お隣の長崎県総合水産試験場や(研)水産総合研究センター-西区水産研究所と三機関共催で行っている恒例イベント。長崎魚市場で同日開催の第34回長崎さかな祭り、魚イベントのハシゴをするのも楽しいですね。(会場間の無料シャトルバスあり)

日時/平成27年10月18日(日)9時半~15時

場所/長崎市多良良町1551 ※駐車場あり

問/長崎大学環東シナ海環境資源研究センター事務局 ☎095-850-7311

11月7日

テクノパワー土木おもしろ体験隊

~土木の世界をかいまみるイベント~



小中学生でも参加できる毎年人気の土木体験イベント「テクノパワー土木おもしろ体験隊」。長崎県「土木の日」DOVOCフェアの一環として、今年も11月7日に行われます。橋を作る、コンクリートを固めるといった土木技術体験や、砂地盤の液化化実験など、体験メニューはどれも本格的なものばかり。すべての体験をするとプレゼントももらえます。また、建設機械操縦の体験もあります。参加無料(要事前予約)

日時/平成27年11月7日(土)13時~16時 場所/長崎大学文教キャンパス

問/長崎大学工学部工学科社会環境デザイン工学コース内「土木の日(土木おもしろ体験隊)」係 ☎095-819-2626 E-mail taiken@cee.nagasaki-u.ac.jp

11月21日

11月22日

2015長大祭

~テーマはSprout!!~



今年のテーマは「Sprout!!」。芽を出す、成長し始めるという意味の言葉で、目指しているのは芽が出たばかりの若々しい植物のようなパワーあふれる学生による長大祭。今年度は、総合体育館に特設ステージを設置し、様々な企画を開催予定です。毎年大人気の「ミスコン」「お化け屋敷」に加えて「コスプレバトル」もお楽しみください。そのほか、新たに2つの観客参加型イベントも予定しています。フード類の出店もたくさん出るので、1日楽しめますよ。

日時/平成27年11月21日(土)・22日(日)9時~21時

場所/長崎大学文教キャンパス

問/学生支援部学生支援課 ☎095-819-2071

HP/<http://nagasakiunifex.wix.com/nagasakiunifex>

申込方法や最新情報など、詳しくは長崎大学のホームページをご覧ください。

<http://www.nagasaki-u.ac.jp/>